

17世紀の「実りを結ぶ会」と アッカデミーア・デラ・クルスカ

——ルター／マキアヴェリとライブニッツ／ガリレオの間の二つの言語協会

清水 朗

I. 序

17世紀前半にドイツではいくつかの「言語協会 (Sprachgesellschaften)」が設立された。その目的は、第一に学問や公的・行政分野におけるラテン語および文化的・社会的分野におけるフランス語とイタリア語の優勢に抗して発展させられる必要のあったドイツ語の涵養であり、第二に「ドイツ人の美德 (deutsche Tugend)」⁽¹⁾の促進であった。これらの言語協会の中で、1617年に創立された「実りを結ぶ会 (Fruchtbringende Gesellschaft : 以下 FG)」は最も初期の、かつ最も重要なものであった。創立者のルートヴィヒ・アンハルト＝ケーテン侯は青年期に——当時の若いドイツの貴族の間で慣わしとなっていた——イタリア旅行を行い、その際フィレンツェに一年以上滞在した。そこで彼はイタリア語を涵養する目的をもった当時の多くの協会の一つであったアッカデミーア・デラ・クルスカ (以下アッカデミーア) の会員となる。ここから彼はアッカデミーアを自身の FG の模範としたのである⁽²⁾。

(1) この第二の目的は当時「ドイツ的思考の徳心 (deutschgesinnter Tugendmut)」, 「ドイツ的誠実と敬虔 (Teutsche Aufrichtigkeit und Frömmigkeit)」など、様々に呼ばれていた。P. v. ボーレンツはそこに「宮廷のかつ荘重な交際 (conversatio) のドイツ的 [...] 代替物」を見ており、その意味で注目に値する現象であると考えている。さらにボーレンツは言語協会を「17世紀の結社運動 (Sozietätsbewegung) の枠内におけるヴァリエーション」ととらえるべきだと述べている (P. von Polenz, Deutsche Sprachgeschichte, Bd. II, Berlin/New York 1994, S. 115f.).

(2) アッカデミーア・デラ・クルスカは1582年に創立されたが、この種の協会の初のもものではなかった。当時イタリアには類似の協会が各地にあり、中規模の都市に

この論文ではまず FG とアカデミーア の関係を述べ、二つの協会に共通する性格を明らかにする。そのうえで、これらの協会が 16 世紀から 17 世紀末までのドイツ語史とイタリア語史においてどのような位置を占めていたのかを問う。この時期のドイツ語史とイタリア語史の間には——19 世紀の国（家）語形成への途上にあつて——一定の平行関係を見出すことができるだろう。その際、イタリアの言語涵養を目的とした様々な協会はドイツにおけるそれよりも早く成立したことを銘記すべきである。さらに、すでに 16 世紀から 17 世紀（の FG とアカデミーアの創立以後）に亘って、ドイツ語圏とイタリア語圏にはマキアヴェリとルター、ガリレオとライプニッツによって引き起こされたやはり平行的な言語運動が認められることを示したい。そこから、英仏と比べれば比較的遅く、19 世紀に初めて形成されたこの二つの国民国家が言語的観点からも当時平行的な歴史的過程を経ていることが見て取れるのである。

II. 17 世紀ドイツにおける言語協会とイタリアおよび オランダにおける同時代の協会

上述のように、ルートヴィヒ・アンハルト＝ケーテン侯は 1617 年に FG を創立した⁽³⁾。1598 年 4 月から 1602 年の復活祭に及ぶイタリア旅行中、若き日のルートヴィヒは一年以上フィレンツェに滞在し、舞踏、絵画、音楽、文学に勤しみ⁽⁴⁾、帰郷前にアカデミーアの会員となった⁽⁵⁾。アカデミーアで彼は協会員名「燃

は少なくとも一つは存在していた。フィレンツェでその数が大きかった事実は、当時すでにトスカーナ方言がイタリア語の模範とされることが多かったことから理解できる。

- (3) 同年に執り行われたワイマール侯爵夫人ドロテア・マリアの葬式には貴族および平民が列席していたが、葬式の饗応の後、上品な作法と（学識者の言葉であるラテン語に対する）民衆語の純化に努めている様々な外国の言語協会のことに人々の話が及んだ。それを受け、カスパー・フォン・トイトレーベン の提案により、FG の創立が決定された（s. F. W. Barthold, *Geschichte der Fruchtbringenden Gesellschaft*, Berlin 1848 [Nachdruck: 1969], S. 105; K. F. Otto, *Die Sprachgesellschaften des 17. Jahrhunderts*, Stuttgart 1972, S. 15）。

- (4) Barthold, a.a.O., S. 34f.

え立つ者 (Il Acceso)」を名乗り、標語として——彼のエンブレムともなった——「燃える切り株 (La stoppia che arde)」を用い、ペトラルカの詩節「燃えながら我は救いを思う (Fecemi ardendo pensar mia salute)」をモットーとした⁽⁶⁾。他方、フィレンツェのアッカデミアは1582年にフランチェスコ・グラツィーニ・デ・ラスカにより設立され、ダンテ (1265-1321)、ペトラルカ (1304-1374)、ボッカッチョ (1313-1375) に体现される14世紀のトスカーナの書き言葉をイタリア語の理想と見做し⁽⁷⁾、1612年にその辞典 (Vocabolario degli Accademici della Crusca) を刊行した⁽⁸⁾。ルートヴィヒがこのアッカデミアに大きな影響を受け、自身のFGの模範としたことは上の経歴より疑う余地がない。

しかし、ドイツの様々な言語協会の創立を促したのはアッカデミア等のイタリアの協会ではなかった。当時のオランダにも同様の協会が複数あり、その中でももっとも有名なものは「船舶業者協会 (Rederijkerkamers: pl.)」と呼ばれており、それらの協会は主に修辞学と言語の涵養に専心していた⁽⁹⁾。これらがドイツの言語協会に及ぼした直接の影響はいまだ証明されてはいないが、間接的に刺激を与えた可能性はあるだろう。何故ならば、ルートヴィヒはイタリア旅行以前にオランダ、イギリスとフランスへの旅行を行っているからである⁽¹⁰⁾。しかし実際の影響のあり方を論じるのであれば、ドイツの協会とは異なりすでに中世に発展した市民の社会的・文化的自意識に基くオランダの協会の特性にも注意しておかねばならない⁽¹¹⁾。

(5) Otto, aa.O. S. 16; H. Engels, Die Sprachgesellschaften des 17. Jahrhunderts, Gießen 1983, S. 96f.

(6) Otto, ebd.; Engels, ebd. ルートヴィヒは協会員名、標語とエンブレムの習慣を後にFGにも持ち込み、自身は「養うもの (der Nährende)」という協会員名を名乗った。

(7) Barthold, aa.O., S. 34f.

(8) Otto aa.O., S. 7; Engels, aa.O. S. 97.

(9) Otto, aa.O. S. 8; Engels, aa.O. S. 121.

(10) Barthold, aa.O., S. 30ff.

(11) Engels, aa.O., S. 122.

Ⅲ. マキアヴェリとルター：16世紀の生きた民衆語の擁護者達

フィレンツェのアカデミアは、上述のように14世紀の三大詩人によって用いられたトスカーナの書き言葉をイタリア語の理想として掲げていた。それに対し、FGや他のドイツの言語協会の会員たちにとっての模範的なドイツ語は非常に人為的なものであったと思える。何人かの人々、特にアノマリスト (Anomalisten)⁽¹²⁾ はマイセンドイツ語あるいは上部ザクセン方言⁽¹³⁾を模範と見做していたが、当時のドイツにはフランスにおけるブルボン朝のような重要な文化的中心は存在しなかった。その限りにおいてドイツ規範語はFGの会員でもあったM. オーピッツ⁽¹⁴⁾のような知識人達による仮構であり、それは現実から全く乖離していたとは言えないかもしれないが、人為的かつ非常にエリート主義的なものだった。そしてこの人為性こそが、「上流階級の」上部ザクセン方言を理想とした18世紀後半のJ. Chr. アーデルングにまで至るドイツ規範語の特徴となっていたのである。

しかし、実は17世紀のイタリア人にとっても14世紀のトスカーナの文語は同様に人為的なものではなかっただろう。イタリア語史では「言語の問題 (questione della lingua)」がルネッサンス文献学の重要なテーマとして扱われる。その際14世紀のトスカーナ方言に対する態度により、三つのグループが区別される。第一のグループは正統派の言語の古風な在り方をよしとし、14世紀のトスカーナの文語を規範として掲げる。このグループの代表はベネチア出身の古典文献学者ピエトロ・ペンボ (1470-1547) で、彼は自ら詩作もし、ペトラルカから大きな影響を受けていた。第二のグループは、ローマの宮廷語——これは「宮廷語 (lingua cortigiana)」あるいは「イタリア標準語 (lingua comune italinana)」と呼ばれ

(12) アノマリスト (Anomalisten) は言語慣習の原則に従ったのに対し、アナログスト (Analogisten) は言語そのものに内在する規則性の原則に従った言語の規範化を目指していた。FGの中ではルートヴィヒ侯が前者の立場を、J. G. ショッテリウスとG. Ph. ハルスデルファーが後者の立場を代表していた。

(13) Vgl. von Polenz, S. 117; A. Gardt, *Geschichte der Sprachwissenschaft in Deutschland. Vom Mittelalter bis ins 20. Jahrhundert*, Berlin/New York 1999, S. 128.

(14) Vgl. Martin Opitz, *Das Buch von der deutschen Poeterey*, Breslau 1624. In: M. Opitz, *Gesammelte Werke, Kritische Ausgabe*, hrsg. von G. Schultz-Behrend, Bd. II, 1. Teil, Stuttgart 1978.

たが——を模範としていた。この立場は明示的には、ローマで研鑽を積んだ人文主義者のヴィンチェンツォ・コッリ（1460-1508）により唱えられ、実践面においては有名な『廷臣論（Libro del cortegiano）』の著者であるバルダサレ・カステリオーネ（1478-1529）に代表される。第三のグループにはニコロ・マキアヴェリ（1469-1527）が属するが、彼は『君主論（Il principe）』を代表とする著名な政治哲学書の執筆の傍ら、望ましいイタリア規範語についても態度を表明していた。それを彼は「現代トスカーナ方言（toscano moderno）」、つまりは当時フィレンツェ（あるいはトスカーナ）において実際に話されていた方言であるべきだとしたのである⁽¹⁵⁾。

以上の三分類によれば、アッカデミーアはトスカーナ（あるいはフィレンツェ）の14世紀の文語を範とし、P. ベンボによって代表される第一のグループの後継者だと見做せよう。上述したその辞典（Vocabolario）もその趣旨で編纂されている⁽¹⁶⁾。アッカデミーアのこの立場はその後数世紀間イタリア語にとり規範的なものとされた。

残る二つの立場、つまりローマの宮廷語を支持する立場とトスカーナの話し言葉を支持する立場はその後どうなっただろうか。

ローマの宮廷語は通用範囲が非常に限られており、イタリア語の歴史を通しては生き延びることはできなかった。しかしトスカーナの話し言葉は、文語あるいは書き言葉の優位にも関わらず、全く背景に退いた訳ではなかった。そのため、トスカーナの話し言葉の最も著名な擁護者であるマキアヴェリの言語思想をより詳しく見てみることにする。

その際に重要であると思われるのは、第一にマキアヴェリの同時代人が——文学の領域以外では——殆ど常にラテン語を用いていたのに対し、彼は自らの主著（特に『君主論』）で俗語あるいは民衆語とされたイタリア語を用いた点と、第二にそのイタリア語がトスカーナの話し言葉であった点である。

(15) Vgl. Chr. Schmitt, Typen der Ausbildung und Durchsetzung von Nationalsprache in der Romania. In: Standardisierungsentwicklungen in europäischen Nationalsprachen, hrsg. von U. Ammon/K. J. Mattheier/P. H. Nelde, Tübingen 1988, S. 97f.; V. della Valle/G. Patota, L'italiano. Biografia di una lingua, Milano 2006.

(16) Vgl. Schmitt, a.a.O., S. 98.

第一の点については、マキアヴェリが俗語を用いることによって、当時政治の世界で活躍していた人々に向けて書くことができた、という事実注目すべきだろう。何故ならば当時の非聖職者達は大抵ラテン語を理解できず、俗語により初めてマキアヴェリの著作を理解し、そこから利益を得ることもできたからである。彼は世俗の権力者へ影響を与えることを望んでいた。この立場は、支配者の理想をスコラ的、形而上学的あるいは神学的な枠組みにおいてラテン語で抽象的に記述し、世俗の支配者には殆ど注意を向けなかった当時の大多数の知識人達の立場とは対照的なものだった。これらの知識人達はむしろ中世の聖職者の世界に属していたのである。

俗語の中でもトスカーナの話し言葉を用いたという第二の点もまた大体同じ理由から説明がつくだろうが、ここでは事態をより詳しく見てみよう。『我々の言語についての論議あるいは対話 (Discorso o dialogo intorno alla nostra lingua)』⁽¹⁷⁾というイタリア語についての著作の中でマキアヴェリは14世紀の三大詩人のトスカーナ方言の使用を賞賛し⁽¹⁸⁾、他の方言、何よりもローマ方言に対するその優越性を主張している⁽¹⁹⁾。彼によれば、三大詩人はトスカーナ方言の言語構造的優越性を生み出したのであり、それゆえそれは全イタリア民族の話し言葉の基礎となり得るのだ⁽²⁰⁾。彼が話し言葉を選択した事実は、言語の文学的・美学的使用を最重要視し、14世紀トスカーナ方言の古典的な書き言葉に執着したP.ベンボと彼を分かťことになる⁽²¹⁾。ここにおいてもまたマキアヴェリが——俗語の選択そのものと同様に——理解の容易さを重視していたことがわかる。その主著『君主論』こそがまさに、明瞭さと読者への訴える力を前面に押し出し、彼の理想的文体を実現しているのである⁽²²⁾。

(17) Niccolò Machiavelli, *Discorso o dialogo intorno alla nostra lingua*, a cura di B. T. Stozzi, Torino 1976.

(18) *Ibid.*, p. 8 et suiv., 13 etc.

(19) *Ibid.*, p. 20 et suiv.

(20) *Ibid.*, p. VLVIII.

(21) *Ibid.*, p. LIV.

(22) 例としてここに『君主論』の第一章を引用する。"Tutti gli stati, tutti e' dominii che hanno avuto e hanno imperio sopra gli uomini, sono stati e sono o repubbliche o principati. E' principati sono: o ereditarii, de' quali el sangue del loro signore ne sia suto lungo tempo principe, o e' sono nuovi. E' nuovi, o sono nuovi tutti, come

マキアヴェリの言語使用における実生活との近接性は同時代のドイツ人マルティン・ルター（1483-1546）を思い起こさせる。ルターは聖書のドイツ語訳（『新約聖書』[1522]、『旧約聖書』[1534]）によって何よりも有名だが、ドイツ語史においては彼は長い間これら聖書訳と他のドイツ語で著わされたキリスト教著作のゆえに「新高ドイツ語の父」とされていた。この見解は——20世紀後半の諸研究の後——確かに相対視する必要があるが、ルターが近現代のドイツ語形成に大きく貢献し、その生みの親の一人であることは動かし難い事実である。ドイツ語による著作活動により、彼は殆ど常にラテン語で著述しエリート主義的あるいは聖職者的環境に留まっていた当時の人文主義者と聖職者に抵抗した。彼らとは異なり、ルターは生き生きとした民衆語の使用により、普通の人々に自分の意見を聞き届けられるよう努めたのである。『翻訳についての書簡（Sendbrief vom Dolmetschen）』（1530）に彼は書いている：「人はラテン語での用法を尋ねてはいけない、／ドイ

fu Milano a Francesco Sforza, o sono come membri aggiunti allo stato ereditario del principe che li acquista come è el regno di Napoli al re de Spagna. Sono questi domini così acquistati, o consueti a vivere sotto uno principe, o usi ad essere liberi e acquistoni si o con le attimi d'altri o con le proprie, o per fortuna o per virtù.” (N. Machiaelli, *Il principe*, a cura di R. Aron/F. Melotti/E. Janni, Milano 1975/1986, p.85 et suiv.).「これまで人々を治めてきた国や領土、また現に治めている国や領土はすべて、共和国と君主国のいずれかである。君主国は、統治者の血筋を引くものが長年にわたって君位を占めてきた世襲君主国と、新たに生まれた君主国のいずれかである。また新たに生まれた君主国としては、フランチェスコ・スフォルツァが治めはじめたあのミラノのごとくまったく新しい国と、イスパニア国が現に治めているナポリ王国のごとく、一人の君主が、もとの世襲の国土にいわば手足のように併合してしまう、新たな国とがある。ところで、こうして得られる国土には、従来君主の支配下に慣れて暮らしているばあいと、自由な暮らしに慣れているばあいとがある。また国の獲得のしかたに、他国の武力によるときと、自分の武力によるときとがあり、さらにはまた、運（フォルトゥナ）によるばあいと、力量（ヴィルトゥ）によるばあいとがある。」（マキアヴェリ『君主論』池田廉訳 中公文庫 1975年 11～12頁）

この引用箇所は今日の読者にも比較的容易に理解が可能であり、その点で14世紀の三大詩人の飾られた複雑な文体とは異なっている。文体的観点から言うと、選択肢を示す接続詞“o...o...”（「～かあるいは～」）の繰り返しによる一義的な結論づけ（“dilemma”：両刀論法）の多用が非常に大きな効果を生み出している。

ツ語でどう語るべきかを考える時に、／でもそれをこのロバどもはやっているのだ、／そうではなく、家にいる母親や／小路の子供達や／市場にいる市井の人々にそのことを尋ね、／彼らが話すときに口もとを見て、／そして翻訳しなければならないのだ、／そうすればこれらの人々はそれ（＝翻訳された言葉）を理解し、／ドイツ語を話しているのだと気がつくだろう。(23)」民衆語（ドイツ語）を用いながらも、エリート主義的な不自然な文体で著作をしていた当時の聖職者達（「ロバ」）が、結局のところいかに民衆から乖離しているかを弾劾するこの批判は、ルターが言語的観点においても反聖職者的・反スコラの・反中世的な態度をとっていたことを示している。

ルターのドイツ語は通常東中部ドイツ語と（南部の）「共通ドイツ語」という、当時の二つの優勢だった言語形態の間の妥協としての混合と見做されている。いずれにせよ、ルター以後、16世紀および17世紀には、「ルターのドイツ語」を理想として参照する文法家達も現れたのである(24)。

以上のことから、マキアヴェリとルターという二人の近代への扉を開いた——一方は政治思想において、他方は宗教思想において——同時代人にあっては、言語に対する姿勢においても共通したものが見出されることがわかる。彼らの用いた文法や語彙が当時の現実の民衆の言葉を忠実に反映しているかどうかはいまだ十分に解明されていない。しかしより重要な事実、マキアヴェリとルターの言語思想が——近代への大きな一歩にも関わらず——エリート主義的な姿勢を維持する17世紀の主流の言語思想家や文法家によって直接には継承されなかったことである。この二人とアカデミーやFGの会員との間には一定の言語思想上の溝が横たわっていたのだ。

(23) “[...] man mus nicht die buchstaben inn der lateinischen sprachen fragen / wie man sol Deutsch reden / wie diese esel thun / sondern / man mus die mutter ihm hause / die kinder auff der gassen / den gemeinen man auff dem marckt drumb fragen / und den selbigen auff das maul sehen / wie sie reden / vnd darnach dolmetschen / so verstehen sie / wie sie reden / und mercken / das man deutsch mit in redet.” (Zitiert aus: P. v. Polenz, Deutsche Sprachgeschichte, Bd. I, Berlin/New York³2000, S. 231).

(24) 例えばヴォルフガング・ラトケ（ラヒティウス）（1591-1635）。また、これらの文法家達は往々にしてルターのドイツ語をマイセンドイツ語と同一視していた。

IV. ガリレオとライプニッツ：17世紀の言語改新者としての自然科学者達

上述のように、マキアヴェリとルター言語思想はそれに続く世紀、イタリアでアカデミアが、ドイツでFGのような言語協会が優勢となった時には直接継承されなかった。双方の言語地域ではそれに対しエリート主義的で人為的な規範的思考が支配的となった。

しかしながら17世紀には近代の曙を告げると同時に民衆語に対するエリート主義とは異なる立場をとった二人の自然科学者が存在していた。ガリレオ・ガリレイ(1564-1642)とヴィルヘルム・ライプニッツ(1646-1716)である。

ガリレオはトスカーナ地方のピサで生まれたが、彼の家はフィレンツェの出身であった。そのため、彼の日常用いていた方言はフィレンツェ方言と非常に近かった。そして大多数の同時代の自然科学者達が当時の通例に倣いラテン語で著述を行っていたのに対し、ガリレオは殆ど常にイタリア語で著作を著わしていたが、それは普通の人々にも自分の仕事を知らしめるためだった。『黄金計量者 (Il saggiaiore)』(1623)ではガリレオの反対者オラツィオ・グラッシ(1583-1654)がラテン語で発言するのに対し、ガリレオ自身はそれに対する反証をイタリア語で行っている。同様の言語の使い分けは彼の主著『天文対話 (Dialogo sopra i due massimi sistemi del mondo)』(1632)でも行われている。ここではサルヴィアアーティ、シンプリチオ、サグレードという三人の登場人物がプトレマイオスの天動説とコペルニクスの地動説という二つの天体システムについて議論する。サルヴィアアーティは地動説を擁護し、シンプリチオは天動説を擁護するが、サグレガードは偏見のない自由精神をもつ者として意見を述べる。対話は通常イタリア語で行われるが、あちらこちらでシンプリチオによって——自説を擁護するために——ラテン語でアリストテレスからの引用が行われ、時折対話が二言語で行われているかのような印象を与える。ここでその典型と言える箇所を引用しよう(カギカッコ内がラテン語の箇所)。

シンプリチオ [...]ですから第三の反論に進みましょう。「さらにまた、なぜこれほど異なった事物が西から東へ赤道に平行に動かされるようになってい

るのか。しかもたえず運動し、一時も停止せずに」。

サルヴィアチ これらのものは西から東へ赤道に平行に、停止することなく、ちょうど君が東から日へ赤道に平行に、停止することなく動くと思っておられるのと全く同じ仕方です、動くのです。

シンプリチオ 「なぜ高いところにあるものは速く、低いところにあるものは遅いのか」。

サルヴィアチ それは自己の中心の周りを回転する球あるいは円において、中心から離れた部分はより大きな円を画き、近い部分は同じ時間により小さな円を画くからです。

シンプリチオ 「なぜ赤道に近い部分はより大きな円を画いて運ばれ、離れた部分はより小さな円を画いて運ばれるのか」。

サルヴィアチ 赤道に最も近い部分が遠い部分より大きな円を画いて動く恒星天球をまねるためです。

シンプリチオ 「なぜ同じ球でも、赤道の下では大地の中心の周りにある最大の円周を信じ難い速さでまわり、反対に極の下ではまわらず、それ自身の中心の周りを最大の遅さで自転するのか」。

サルヴィアチ もし日周運動が恒星のものであれば、恒星がするであろうことをまねるためです。

シンプリチオ 「なぜ同じもの、たとえば鉛の球は、一度大地の周囲を最大円を画いてまわると、いつでもどこでも最大円を画いて回転するということがなく、赤道から移されるとより小さな円に動くのか」。

サルヴィアチ それは、いくつかの恒星が、プトレマイオスの学説ででもそうですが、そのようにするからです。これらの星はかつては赤道のごく近くにあり、最大の円を画いていたのですが、今は赤道から離れてより小さな円を画いているのです。(25)

(25) ガリレオ・ガリレイ『天文対話・上』青木靖三訳 岩波書店 1959年 359～360頁

“Simplicio. [...] Seguirò dunque la terza istanza: *Insuper, qui fit ut istae res tam variae tantum moventur ab occassu in ortum parallelae ad aequartorum? ut semper moveantur, numquam quiescant?*”

シンプリチオは、アリストテレス以外にも、ウェルギリウスやホラティウスからの引用をラテン語で行っており、さらにラテン語の専門用語を用いている（シンプリチオのラテン語による発言箇所は45か所）。これに対しサルヴィアータの発言には二か所のみにラテン語が用いられている。これにより、当時の平均的な自然科学を代表する中世的・スコラ的・聖職者的なシンプリチオと、ガリレオの似姿である近代的で自由思想をもつサルヴィアータの対立が視覚的・文体的に前面に押し出されているのである(26)。

Salviati. Muovendosi da occidente in oriente, parallele all'equinoziale, senza fermarsi, in quella maniera appunto che voi credete che le stelle fisse si muovano da levante a potente, parallele all'equinoziale, senza fermarsi.

Simplicio. *Quare quo sunt altiores celerus, quo humiliores tardius?*

Salviati. Perché in una sfera o in un cerchio che si volga intorno al suo centro, le parti più remote descrivano cerchi maggiori, e le più vicine gli descrivano nell'istesso tempo minori.

Simplicio. *Quare quae aequinoctiali propriiores in maiori, quae remotiores in minori, circulo feruntur?*

Salviati. Per immitar la sfera stellata, nella quale le più vicine all'equinoziale si muovon in cerchi maggiori che le più lontane.

Simplicio. *Quare plia eadem sub aequinoctiali tota circa centrum Terrae ambitu maximo, celeritate incredibili, sub polo vero circa centrum proprium gyro nullo, traditate suprema, volveretur?*

Salviati. Per immitar le stelle del firmamento, che farebbon l'istesso se 'l moto diurno fusse loro.

Semplicio. *Quare eadem res, pila v.g. plumbea, si semel Terram circuevit descriptio circulo maximo, eadem ubique non circummigret secundum circulum maximum, sed translata extra aequinoctialem in circulis minoribus agetur?*

Salviati. Perché così farebbero, anzi pure hanno fatto in dottrina di Tolemeo, alcune stele fisse, che già erano vicinissime all'equinoziale e descrivevan cerchi grandissimi, ed ora, che ne son lontane, gli descrivon minori.”

(Galileo Galilei, Dialogo sopra i due massimi sistemi del mondo tolemaico e copernicano, a cura di D. Besomi/M. Helbing, tomo I: Testo, Padova 1998, p.259 et suiv.)

- (26) 皮肉なことに『天文対話』はイタリア語の原典よりもラテン語翻訳によってより多く読まれたので、ガリレオの学説も彼の同時代人の間では主にラテン語版を通

ここではつまり、ほぼ100年の時を隔てて、自然科学の分野でマキアヴェリの後継者が見出されるのだ。その活動分野こそ異なっていたものの、この二人の業績は言語思想の平面では同じ方向に、あるいは思想史の表現を用いれば、近代に向かっていた。

17世紀のドイツ語圏について言えば、天才哲学者にして数学者のG.W.ライプニッツの存在が無視できない。ライプニッツは主著をフランス語あるいはラテン語で著わしたが、ドイツ語の改善に関する二本のドイツ語論文を残している⁽²⁷⁾。彼は、一般の人々が学問におけるラテン語の独占状態が原因でその世界から締め出されていると考え⁽²⁸⁾、そのため、ドイツ語が学問での使用に適した言語になることを望んでいた。ガリレオの周辺と同様に当時のドイツでも民衆語で学問的著作を行うことは不適切あるいは不可能であると考えられていたのである⁽²⁹⁾。この状況を、M.モンテーニュがすでに1595年に『エッセー (Les essais)』を、J.ロックが1689年に『人間悟性に関する試論 (An Essay Concerning Human Understanding)』をそれぞれの母語で著わすことができたフランスやイギリスの状況と比較してみるべきであろう。

その一方でライプニッツは数学的公式で表された言語体系の構築を試みていた⁽³⁰⁾。17世紀には文法家や詩人による規範言語への努力と並び、いかなる個別言

じて広まったことになる。このためここで述べた文体的効果もなきものになってしまった。しかしラテン語版が存在していなければ、彼の学説はさらに後代にならなければ——いつかはわからないが——認められなかっただろう。このエピソードは、ダンテが民衆語を擁護するための書である『俗語論 (De vulgari eloquentia)』を、知識人に読ませるためにラテン語で書かなければならなかった事実を思い起こさせる。

(27) 『ドイツ人に対する、その理性と言語をよりよく用いるための訓戒 (Ermahnung an die Teutsche, ihren Verstand und Sprache beßer zu üben)』(1675), 『ドイツ語の鍛錬と改良に関する私見 (Unvorgreifliche Gedanken, betreffend die Ausübung und Verbesserung der deutschen Sprache)』(1687)。

(28) G. W. Leibniz, *Ermahnung, Sämtliche Schriften und Briefe* [Akademieausgabe], 4. Reihe, Bd. 3, Berlin 1986, S. 809.

(29) ライプニッツの同時代人であるクリスチアン・トマジウスは、講義でドイツ語を用いたために大学を去らねばならなかった。

(30) Cf. U. Eco, *La ricerca della lingua perfetta*, Roma/Bari 1993, pp.289-313.

語からも独立し、論理学のみに基礎を置いた言語としての「普遍言語 (lingua universalis)」を発明する試みが存在した⁽³¹⁾。ライプニッツもまた言語学、論理学と数学の総合を彼の「一般的形式学 (speciosa generalis)」(これは「記号法 (ars characteristica)」と「結合法 (ars combinatoria)」からなる)によって試みた。これにより彼は形式論理学における数学的方法の体系的な応用に貢献したのである。さらに普遍言語の観念は思想上、その使用者を理性的思考へと教育すべきである「理性的言語 (lingua rationalis)」と結びつけられていた⁽³²⁾。

「数学的言語」ということに関して言えば、ガリレオの『黄金計測者』からの以下の箇所に注意されたい。

「常にわれわれの目の前に開かれているこの大いなる本 (私は宇宙と言おう)の中には哲学が書かれているが、まず人がその言語を学び、それによってこの本が書かれている文字を知らなければ理解することができない。この本は数学的言語で書かれており、その文字は三角形、円や他の幾何学的形態である。それらの媒体なしには人の力をもって言葉を理解することはできない。これら抜きでは暗い迷路の中を無駄にさまよい続けるこうになってしまう。⁽³³⁾」(下線は筆者による)

ここでは宇宙という本の理解のための論理的基礎である数学が比喩的に「数学的言語」と呼ばれている。その限りでこの表現は直接的に本来の言語に関連するものではないが、ガリレオが事実の中にひそむ真理を数学的あるいは論理的「言語」の助けによって探し理解しようとする根底的な精神的姿勢にライプニッツもまた従って

(31) Vgl. Gardt, a.a.O., S. 135f.

(32) Vgl. ebd., S. 136.

(33) “La filosofia è scritta in questo grandissimo libro che continuamente ci sta aperto innanzi a gli occhi (io dico l’universo), ma no si può intendere se prima non s’impara a intender la lingua, e conoscer i caratteri ne’ quali è scritto. Egli è scritto in lingua matematica, e i caratteri sono triangoli, cerchi, ed altre figure geometriche, senza i quali mezzi è impossibile a intender umanamente parola; senza questi è un aggirarsi vanamente per un oscuro laberinto.” (Galileo Galilei, Il sagggiatore, a cura di D.Besomi/M. Helbing, Roma/Padova 2005, p. 119 et suiv.)

いるのである。この観点においても、17世紀のこれら二人の自然科学者の間には平行的關係が見て取れよう。

V. 結語

この論文ではまず、17世紀のドイツ語圏で最も声望の高い言語協会であった「実りを結ぶ会」が、ドイツ語を洗練しそのことによりドイツ規範語を確立するために——フィレンツェの「アカデミア・デラ・クルスカ」の影響のもとに——成立した事情について述べた。

ドイツではフランスのバリやヴェルサイユの王宮に匹敵する文化的中心が不在であったため、FGはマイセン方言あるいは上部ザクセン方言をドイツ語の理想としていたにも関わらず、その目標は抽象的なものにとどまっていたが、アカデミアもまた、ピエトロ・ベンボの後継者として14世紀のトスカナ地方の書き言葉を模範としていたため、民衆からはかけ離れた存在であった。さらにこれら二つの協会はしばしば貴族から会員を選んでいたため、非常にエリート的な性格を帯びていた。

16世紀のマキアヴェリとルターはこれとは対照的な立場に立っていた。一方は政治思想において、他方は宗教思想において近代の始まりを告げたのだが、彼らはその言語使用により、ラテン語での著述を常としたスコラの・聖職者的な中世世界に抵抗した。マキアヴェリは貴族の話し言葉を、ルターは「普通の」人々の話し言葉を自らの記述手段として選ぶことによって。

似たような平行関係はガリレオとライプニッツの間にも見てとれる。彼らはそれぞれ自らの母語を対象とする言語協会の創立から約半世紀後の時代を生きた。言語面ではとりわけ保守的な自然科学において二人は民衆語の使用を目指した。ガリレオは普通の人々にも自身の発見を知らしめたかったからであり、ライプニッツはドイツ語が「学問の使用に耐える」ようになることを望んでいたからである。そのためにガリレオはマキアヴェリやルターと同様に、スコラの・聖職者的なラテン語を使用する学者達と対決しなければならなかった。ガリレオとライプニッツには数学的あるいは論理的言語の発想もまた共通している。ガリレオは数学あるいは数学上の術語の知識を彼の言語を理解するための前提として要求し、ライプニッツは純

粹に数学的に定式化された言語を考案しようとした。

ドイツ語もイタリア語も 19 世紀にそれぞれの国民国家の創立の際に初めて国語として認知され、それぞれの国家の全領域への普及が促進された。しばしばこれら二つの国はフランスやイギリスなどの西ヨーロッパの先駆的近代国家と比べ、その「遅れてきた」国民国家形成のゆえにいくつかの観点において類似していると主張される。その意味では本稿で見た二つの地域の言語的および言語思想的現象の時間的平行性は社会的・政治的な発展から理解することができる。

最後に二つの点に注意しておきたい。まず、言語と言語的同一性は国民国家形成のための最も重要な要素の一つではあるが、唯一のものではないこと。それ以外にも宗教や宗派、人種、政治の原則などが重要な要因に数えられる。しかしながら言語的要因は、とりわけドイツ語圏において、特にヘルダー以降決定的なものとして見做されてきた。ここには、B. アンダーソンの主張に従えば、一種の「ヨーロッパ中心主義」を認めることができるかも知れない⁽³⁴⁾。そのためドイツとイタリアの国民国家形成が時期的に近い事実とこれら二地域において言語に関係する出来事がほぼ同時期に起こったとする筆者の指摘も相対視する必要があるだろう。さらに第二点として、国家やナショナリズムという概念自体も議論の余地があり、これに関する学問的コンセンサスもないという事実がある⁽³⁵⁾。この小論ではこの点に立ち入って述べることはできなかったが、これに関する研究の実情は常に視野に入れておくべきである。

イタリア語史におけるマキアヴェリとガリレオの果たした役割という上に示した事実は専門家達には周知のものである。同様に——特に学問的、行政的および法的領域における——民衆語の使用が近代の始まりの重要な指標であるという点もしばしば指摘されてきた。しかしながら筆者の意図は、この二つの問題領域に——両言語地域を比較しながら——立ち入り、上述の諸事実を時代的に関連づけ、さらに両地域における後世の国民国家形成と多分関連があるだろう思想史的な平行関係を見

(34) B. Anderson, *Imagined Communities. Reflections on the Origin and Spread of Nationalism*, London/New York 1983/2006 (with new material).

(35) Vgl. A. Stukenbrock, *Sprachnationalismus. Sprachreflexion als Medium kollektiver Identifizierung in Deutschland (1617–1945)*, Berlin/New York 2005, bes. S. 42ff.

出すことにあったことを了解いただきたい。

※この論文は、筆者による „Die Fruchtbringende Gesellschaft und die *Accademia della Crusca* im 17. Jahrhundert—Zwei Sprachvereine zwischen Luther/Machiavelli und Leibniz/Galilei“ (In: Hitotsubashi Journal of Arts and Sciences, Vol. 49 No. 1, Dec. 2008, S. 1-9) を追加・訂正を含め、邦訳したものである。引用箇所も含む全体の邦訳により、より多くの読者の目に留まることを願った。